# みやぎ水再生センター界隈の今昔

平成十六年度から東京の下水処理場の名称が「水再生センター」に変わりました。区部にある十三の処理場・水処理センターと多摩地域にある七つの処理場を合わせた二十箇所においてです。さらに、このうち二つの処理場では冠の部分の固有名詞も変わり、新河岸東が「浮間」に、小台が「みやぎ」になりました。地元からの要望もあり、地域に愛され親しまれるようにと所在地名にしたとのことです。

そこで、今回の職場界隈探訪では、ひらがなの「みやぎ」を冠にいただき、ひときわさわやかな名称に生まれ変わった「みやぎ水再生センター」界隈の今昔を訪ねてみることにしました。

探訪ルートは、最寄りのＪＲ王子駅からスタートし→石神井川沿いに隅田川との合流点→隅田川を遡り豊島橋を渡り→隅田川の堤防と荒川の堤防が会合している地点→荒川の堤防を下り→江北橋を渡り→再び戻り→宮城、小台地区です。

▲ 隅田川（左）と荒川（右）

▲ 現在の宮城・小台地区

## 「みやぎ」という地名のいわれ

この地名は、戦国時代から足立郡内の「宮城」として存在しています。この地を所領していた戦国武将、宮城氏に因むものと考えられています。宮城氏の出自をさかのぼりますと、遠く奥州の宮城本郷（宮城県仙台市付近）を本拠地とし、鎌倉幕府発足当初から御家人として幕府に仕えていた奥州・宮城氏にいきつきます。武蔵の国の名族豊島氏（本拠地は北区中里）との婚姻関係によりこの地域を所領としたようです。

武蔵・宮城氏は、十六世紀半ばには岩付城（埼玉県岩槻市）の太田氏の配下となっています。その後、戦国大名・小田原の後北条氏の重臣（知行地は足立区のほか埼玉県にもあった）として活躍していましたが、豊臣秀吉の関東侵攻による小田原落城で主君を失い、宮城の地を去っています。しかしその後、紆余曲折を経ながらも、その血筋は徳川幕府の旗本（知行地は茨城県）として幕末まで続きます。

宮城氏が大旦那として十五世紀末に創建した性翁（しょうおう）寺が、現在も荒川の江北橋を渡ったやや下流の土手の近くにありますが、ここに、戦国期の宮城一族の墓があります。

みやぎ水再生センターの敷地はかつて川端耕地と呼ばれた微高地でしたが、「新編武蔵風土記稿」は、「ここは昔、宮城氏の屋敷があったとの伝承のあるところで、今（江戸の後期）は畑である」と記しています。

宮城村は、天保九年で家数五十三軒、三百八人、明治五年でも五十九軒、三百八十三人ほどの集落です。明治

▲ 小台下水処理場の用地（昭和 28 年）
白く光って いる所は荒木田土を採取して水たまりになっている

二十二年に付近の九つの村々が合併し江北村となり、大字宮城と呼ばれました。

昭和七年、足立区が成立したとき、荒川放水路の開削（昭和五年完成）で、大字宮城が南北に二分されていたこと（この時、神社をはじめ多くの家屋が移転）を配慮し、みやぎ水再生センターのある荒川以南が南宮城町に、荒川以北が北宮城町になりました。南宮城町は、その後隣りの小台町の一部を昭和二十二年に編入し、昭和三十二年には宮城町と改称しました。そして、昭和四十一年に現在の宮城一丁目と二丁目とになります。一方、北宮城町は扇・江北などの一部となり地名は消滅してしまいました。

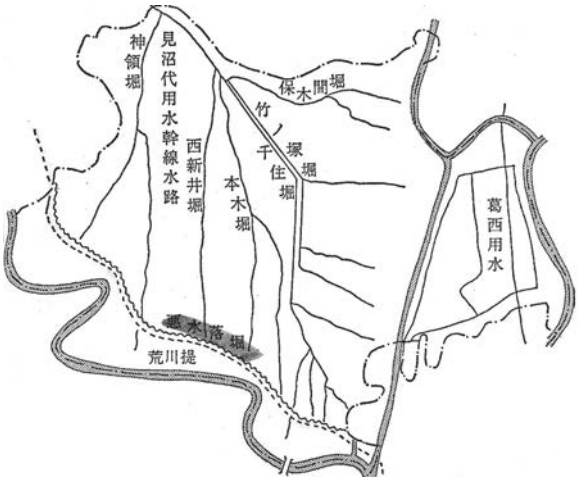
## 里帰りした桜

宮城小学校の隣に南宮城公園があります。公園の名前は、この地区がかつて南宮城町といわれていたことと関連していると考えられます。この公園の一画にさほど太くない桜の木が一本立っていて、説明板が付けられていました。

「アメリカ・ワシントンのポトマック河畔に植えられている日本から贈られた桜の枝から取木した、いわゆる里帰りした桜の木である」という主旨のことが書かれていました。

▲ 里帰りした桜

そして、何故、この公園に植えられているかと言うと、「明治四十五年に、ワシントンへ贈った桜の苗木はこの公園の近くにあった荒川堤で一時育てられたものであり、その後、肝心の本家の荒川堤の桜並木が堤防工事、戦争や大気汚染などの影響で衰退してしまったので、昭和五十六年にワシントンから逆に贈ってもらったもの（約三千本）のうちの一本」だそうです。この事業は、足立区の区政五十周年記念の一環として実施されたのです。




▲ 荒川堤
点線部分が荒川堤である

アメリカに贈った桜について、「ポトマックの桜物語」（外崎克久（東京都下水道局のＯＢ）著）は、次ぎのように述べています。

『明治四十三年四月、尾崎市長によって召集された東京市参事会は、躊躇なく再度のサクラ寄贈を決定した。勿論、経費の全額負担も付帯決議された。…苗木栽培の大作戦が開始されると同時に、五十九種類の中から厳選して十一種類の桜を千住・江北村（現・足立区）の荒川堤に植えた。そこは関東でも桜の名所として知られた場所である。選ばれた品種は、一重桜系統の染井吉野を筆頭に白雪、有明（大きく白い花）、御車返（大きく淡紅白色）、八重桜系統の福禄寿（紅色）、一葉（淡紅色）、関山（かんざん、一番大きな花を持ち紅色）、普賢象（ふげんぞ里帰りした桜里帰りした桜う、淡紅色）、御衣黄（淡緑黄色）そしてよい匂いがし白い花をつける上香、滝香などであった。昨年師走、これらの品種から接里帰りした桜穂一万本以上を採取して興津試験地へ移送し、全ての接穂に青酸ガスくん蒸法で防虫処理を施した上、日陰の乾燥した土の中に貯蔵した。そして、台木へ接ぐ好期となった今

年の二月、接穂を掘り起こし、接ぎ木を完了している』

江北村の宮城地区の荒川堤に、アメリカに贈るための桜の苗木が植えられていたのです。ここでいう荒川堤とは、今の荒川（以前の荒川放水路）の江北橋の北詰めの左岸の辺りに、昔あった土手のことです。昭和初期までは、荒川の「五色桜」と呼ばれた桜の名所でした。

その発端は、明治十九年の地元有志による植樹でした。大正十四年、この「五色桜」が国の名勝に指定された時に建てられた栽桜記碑に、五色桜植樹の経緯が記されています。原文は漢文ですが、概略次のような内容です。

『当時の荒川堤はデコボコで、歩行も困難な状態でした。明治十八年、管内巡視中にここに立ち寄った東京府知事に、後に江北村の初代村長となる清水謙吾が堤の補修工事の許可を求め、翌年には完成しました。清水は、桜を堤の上に植えることを発案、南足立郡長の賛成も得ました。植樹する桜の苗木は、開花の時期が長い八重の里桜が選ばれ、明治十九年三月、七十八種三千二百二十五本が、長さ五.八キロメートルの堤防上に植えられました。この資金は関係地元民が出し合い、その総額は二百九十五円でした』

明治末から大正にかけてが、五色桜の最盛期でした。花見のために、隅田川に多くの乗合船が出、隅田川の定期航路が臨時便を江北まで延長し、堤の両脇には二百人ほども入る掛茶屋が何軒もでき、あふれた人は土手下の民家から畑、空き地にまでいっぱいになって花見を楽しんだそうです。そのにぎわいに地元もおおいに潤いました。

▲ 昔の荒川五色桜
当時は、モノクロの写真に色を付けて絵葉書などにして販売していた。
中央にいる人々は仮装行列をしている。

これほど人々を引き付けた荒川堤の桜ですが、戦中・戦後の荒廃を経て、衰退の一途をたどりました。桜の名所の復活を願ってのワシントンからの「里帰り桜」も昭和二十七年に実現しましたが、自動車の排気ガスの影響でうまく育たず頓挫してしまいました。

さきほどの南宮城公園の桜は、二回目の里帰り桜になります。今度こそぜひ、すくすく育ち、五色桜の復活を目指しひと花咲かせて欲しいものです。

▲ 江北橋の桜をあしらったレリーフ

## 煉瓦の生産

明治の東京においては、官公庁を中心に新しい西洋建築が次々と建てられ、煉瓦の需要が急激に起こりました。宮城地区は、川を挟んで消費地と隣接しており、さらに、川沿いから煉瓦の原土を産出するため、煉瓦の生産に適していました。

『明治二十年頃には、煉瓦工場が続々と建設されその数十五箇所の多きに及び、一ヵ年の産額十万円以上に達し、当時は郡内屈指の工業地として囁された』

と、南足立郡誌（大正五年）は江北村の項で述べています。

この魁になった、下川馬次郎さんが明治八年に創業した下川工場は、明治

十年の第一回内国勧業博覧会に出品し、褒状を受けています。この方は、宮城に古くから住んでいる人であり、大正十二年の関東大震災まで二代にわたり煉瓦の生産を続けました。

当初は家内工業的で、近隣の荒木田土とよばれる土を用い、煉瓦の成形も手作業によって行われていました。それは次のようなものでした。

『運ばれてきた土を鍬で細く切って水をかけ、足で踏みながらこねる。適当にこねあがると大きなだんごにして木製の型枠にたたき込むようにして土をつめ込む。隅々まで土がつめ込まれると、針金に水をつけ型にそって土を切り、型枠を両手で持って型枠から抜く。抜いたものは、長さ一メートル、幅三十センチメートルくらいの板に低い脚のついた台の上に数個ずつ並べて置く。これをロクロの上に乗せ、羽子板のような板で煉瓦の六面を叩いて形を整え、天日に当ててほどよく乾燥させ釜に入れて焼く』

焼きあがった煉瓦は、表面のザラザラしたものと、うわぐすりを塗ったツルツルした上等のものとがありました。

近代的な設備を備えた工場が出現し始めたのは、明治中期を過ぎてからです。

千葉工場は、赤煉瓦建築で有名な東京駅の煉瓦を焼いた工場ですが、明治二九年にその第三工場が宮城にできています。後に東京煉瓦に買収されましたが、近代的な機械製造法をとりそろえた大工場で、工場のそばに社宅をもっていました。

荒川放水路の開削予定地内には、たくさんの煉瓦工場が立地していました。開削工事の着手により取り払われたりし、大正五年には宮城地区を含む江北村の煉瓦工場は三つに減ってしまいました。

さらに、大正十二年九月一日の関東大震災で、煉瓦造りの工作物は地震に弱いことがわかり、これを境に需要がぴたりと止まり、残った煉瓦工場も次々と閉鎖されていきました。

現在では、わずかにかつて煉瓦工場が隆盛であったことを偲ばせるものとして、煉瓦造りの蔵が一つ残っています。大正十年に建てられたもので、震災や空襲にも耐えた風格のある建物です。

▲ 煉瓦造の蔵
この蔵は現在もあるが周りに家が建ち見ることが困難である

## 煙害と畑土の売却

みやぎ水再生センターの川向こうに豊島五丁目団地が建っていますが、以前はここに硫酸や人造肥料をつくる工場がありました。その工場は明治二十九年から操業を始めていますが、宮城地区の人々はこの工場から出される煤煙による煙害に悩まされることになりました。大正二年に提出された「煙害に対する陳情書」は、

『林立する煙突より吐く煤煙は黄白の猛烈な亜硫酸ガスであり、…農作物は発育せず、…呼吸器障害など一種の地方病とも称すべき疾病が逐年増加している』

と、その惨状を訴えています。

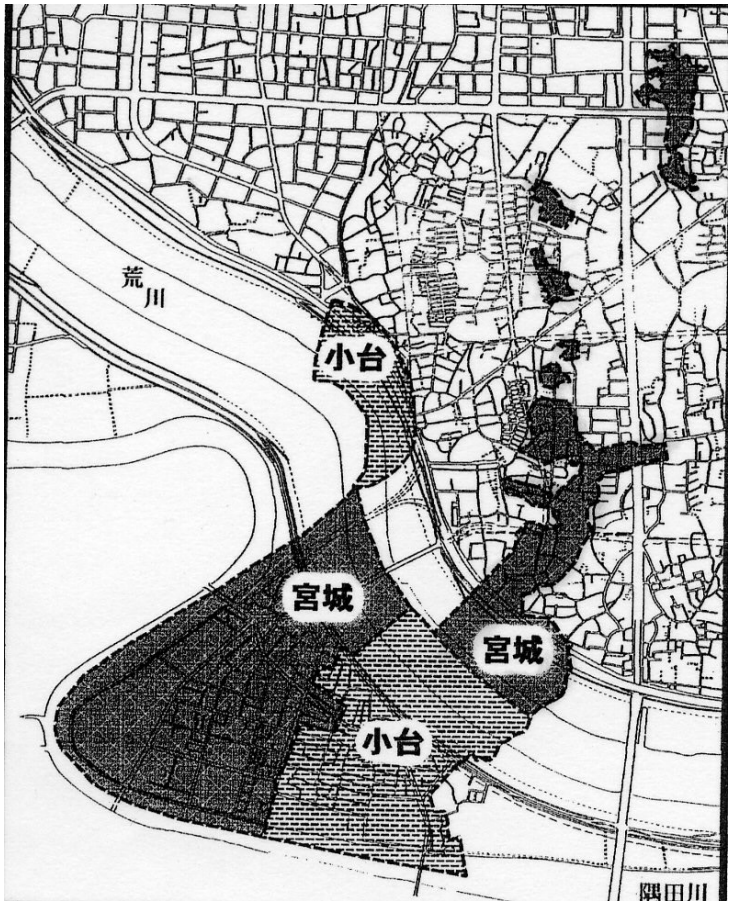
翌年、和解が成立し、損害補償がなされましたが、耕作できなくなった田畑の土を近隣の煉瓦工場に売る農家が続出し、土を大八車に積んで工場に運ぶ姿が多く見られたそうです。そのため、土を掘った跡の穴に水が溜まり、村の半分くらいが池に変わってしまったそうです。

そんなところに、昭和十年代から、研磨材工場や顔料工場などが進出してきました。また、戦後創立された江南中学も、このようにしてできた池を埋め立てて校舎の敷地を整地したということです。

## 処理場の建設計画

小台処理場の建設計画を追ってみました。昭和五年の「東京都市計画郊外下水道設計」に、石神井系統の処理施設として「江北汚水処分場」の名前が記されています。計画上の建設予定地は、足立区南堀之内町となっています。現在の新田三丁目です。ここは、当時の江北村の一画であったため、「江北」としたものと考えられます。この計画は実施されませんでした。

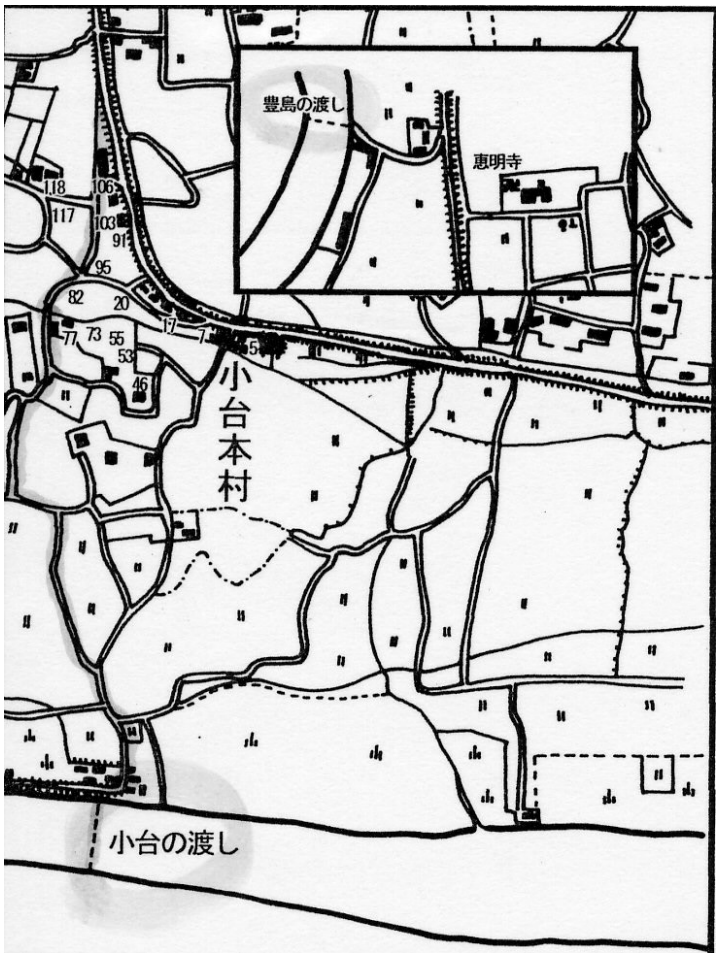
その後、昭和二十五年に建設省の認可をとった「東京都市計画下水道」では、「小台処理場」になっており、建設予定地も足立区南宮城町に変わっています。用地の買収を昭和二十六年二月から始めています。建設予定地の航空写真には大小の池が点在し、社宅と思われる建物がみえます。



▲ 旧小台・旧宮城の集落

「小台」という名称がどうしてつけられたのかは、定かではありません。確かに南宮城町は隣の小台町の一部を編入してはいますが、そこは建設予定地から少し離れています。今回の探訪では、何故、「小台」になったかは「？」のままになってしまいました。

戦後最初に建設された小台処理場は、昭和三十三年六月に工事に着手し、三十七年には運転を開始しています。



▲ 小台の旧集落

## 小台地区

小台地区は、宮城地区の東隣に位置しています。宮城のようなはっきりした地名のいわれはありませんが、古くからの集落です。明治初期で戸数四十二、人口二百二十四

▲ 小台の七庚申

の規模です。しかし、荒川放水路開削によってほとんどの家が、移転をよぎなくされ、わずかに「小台の渡し」の周辺に古い集落が残りました。この渡しは、現在の小台橋のやや上流にありました。

この荒川放水路開削工事によって、散逸の運命にあった庚申塔が集められて、雨露にさらされないようにと屋根を掛けられて大切に、保存されています。小台の七庚申です。正月やお盆には多くの人が参拝に訪れるとのことです。

この地区には西新井大師へ往く古くからの道が通っており、江南住区センター横にその頃の道標が残っています。「弘法大師・六阿弥陀一番へ」と彫られています。

もう一つ、この地区には「豊島の渡し」（現在の豊島橋のやや上流）という渡しがありましたが、その辺りの地番は今では宮城地区に編入されています。

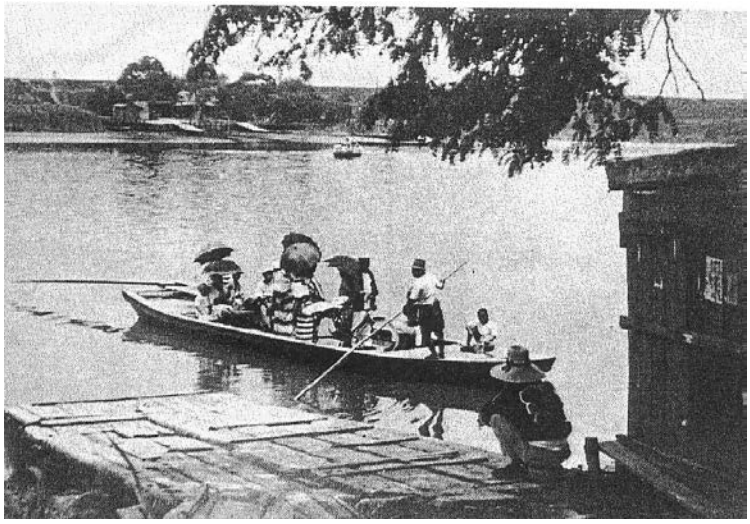
小台の渡しと豊島の渡しは、ともに江戸時代から存在した古い渡しです。明治・大正の頃は荒川堤の桜が隆盛でしたので、春は船がひっくり返らんばかりに満員となったそうです。

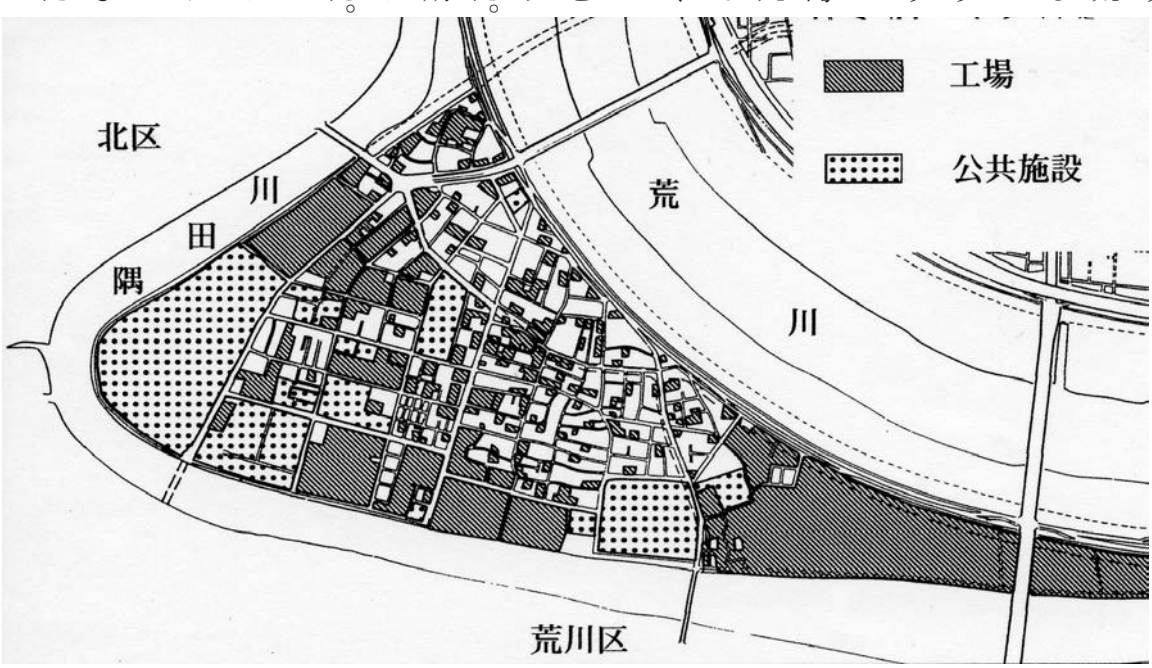
大正十四年に豊島橋が、そして昭和九年には小台橋が、それぞれの渡しの近くに架橋されました。

明治に入り宮城と同様、煉瓦を製造するようになりました。さらに、大正の中期頃から各種の工場の進出が始まりました。工場の建設に当たっては、煉瓦の原土を掘った穴が至る所にあったため、上流の砂を入れて整地しなければならなかったとのことです。

（文責　地田）

▲ 道標


▲ 小台の渡し（昭和４年頃）



▲ 小台・宮城地区の工場分布

**参考資料**

「足立風土記稿　地区編　３　江北」足立区立郷土博物館
「足立区の歴史」足立史談会　名著出版

「東京ふる里文庫　13　足立区の歴史」名著出版
「ブックレット　足立風土記」3　足立区
「足立史談」（394～400号）足立区郷土史料刊行会
「ポトマックの桜物語」外崎克久　鳥影社
「東京の水道」佐藤志郎　都政通信社

## 探訪余話

煉瓦工場で働いていた女性からの聞書きを「炎のなかから生れた近代」から引用し、昭和初期のこの地区の生活実態を再現してみることにします。

『煉瓦工場の男性は、朝の七時から夕方の五時ごろまで働いた。昭和の初めごろ、給料は日給七十銭ぐらいであった。女性の場合は出来高制の日払いで、私は二十銭ぐらいを目標にしていた。東京煉瓦工場は、工場のそばに社宅を持ち、私も社宅住まいができた。六畳と三畳の間取りで、長屋形式で畳はなく、筵敷きで、家賃は八十銭ほどであった。また休日には、トーキー（無声映画）を見に行くこともたまにあった。昼は社宅に戻り、夫婦で昼食をとった。商人たちが工場に日用品を売りに来ていた。そして、その日の夕方に、その日一日の賃金を受け取り退社した。買い物をして社宅へ帰った。当時、宮城では原土を手放してしまったために、田畑が無く、米や野菜がとれず、近くに食料品を売る店もなかった。そのため、荒川ぞいに出る露天商を利用したり、向こう岸へ煉瓦工場の渡し船に乗って、衣類・食料を購入しにいったりした。初午の日（二月初めの午の日）は、工場は休みになった。この日には幟が立ち、職人衆は一日中酒を酌み交わし、女性・子供は煉瓦工場が無料で配る「ゴロンボ」という砂糖の練り菓子やみかんなどを楽しみにした』